平成２３年度厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合研究事業）

分担研究報告書

英国の被虐待児治療センターSACCSの実践の調査研究

研究代表者　　開原　久代
研究協力者　　平田　修三

研究要旨：
社会的養護を受ける子どもの大半が、虐待によるトラウマを背負い対応が難しくなっている。そうした子どもは施設養育が難しいという理由で里親家庭に委託されることがあるが、専門的な支援体制が皆無といえる現状で、里親は被虐待児の呈する様々な行動、症状の対応できわめて困難な養育体験を強いられている。家庭養護における先進国英国では、どのような取り組みがあるかを 5 年にわたる情報収集を行い、重いトラウマ（特に性的被虐待児）を体験した子どもの治療実践を行っているＳＡＣＣＳ治療センターの訪問調査を計画した。
現場を訪問することにより、治療チームのスタッフに接し、重い症状のために転々と里親家庭をたらいまわしされた子どもが SACCS の治療ハウスで３年の育てなおしを受けてから研修を受けた里親に委託され、フォローされるというシステムを体験することができた。そこには、専門性と長年の経験に裏付けられたソーシャルワーカー、治療親、セラピスト、ライフストーリーワーカーの治療チームの活動があり、運営組織が行政を対象とする会社組織であるという英国独自の経営方式をみた。研究代表者開原が主に、治療ハウスと治療親、その研修について報告し、研究協力者平田がライフストーリーワーク（ＬＳＷ）について報告する。

A．研究目的

日本では、虐待などを受けた社会的養護児童が施設や里親家庭で不適応症状を示すと、まず、精神科治療、心理治療などが求められ、時に精神病院入院や、より手厚い対応が得られるという理由で情緒障碍児短期治療施設や児童自立支援施設の処遇が求められることが多かった。

一方、委託された子どもに養育上の困難があっても施設に戻すことはせず、十分な専門的支援もない中で多大な苦労を重ねながら養育を続けている里親家庭もある。

筆者は児童精神科医として、長年不適応症状を示す養護児童にかかわってきたが、一般の精神疾患とは異なる病理背景をもつ子どもへの治療的養護のあり方を模索してきた。

2006 年 9 月、英国 York で開催された第 16 回児童虐待国際学会（ISPCAN）で英国 SACCS の被虐待児の治療支援の報告を聞き、関連する著書（参考文献参照）を読み、治療的環境と治療親による養育、ＬＳWとセラピーの治療チームに関心をもった。特に、精神科医や心理臨床家ではなく、ソーシャルワーカーが中心となって活動し、実務と専門的基盤に根ざしたセラピストとしての役割も備えていることを知り、被虐待児を養育する日本の施設職員、里親への治療支援体制づくりのモデルになることを期待して調査を行った。

B．研究方法

１．訪問先の.SACCS（SACCS 治療有限会社）の概略。所在地は英国イングランド地方にあり、住所は Mytton Mill, Montford Bridge Shrewsbury Shropshire,SY4,1HA,UK である。

1987 年にソーシャルワーカーでセラピストの Mary Walsh により設立されたが、当時、社会的問題となっていた性的被虐待児擁護のための裁判に携わる過程で発足した機関であるため、名称が Sexual Abuse Child Consultancy Service(SACCS)として発足した。しかし、全英

から重いトラウマを背負ったあらゆる被虐待児が紹介されるようになったため SACCS を商品名として登録し、２００３年より会社組織になっている。Shrewsbury の本部事務所と Coleshill の分室がありいづれも治療部門を併設し、全部で１２か所の治療ハウス（グループホーム）（定員総数６０、１ハウスに５人）、１か所の付属の学校と里親養育有限会社を含めた組織となっている。

２．SACCS 訪問調査の実施計画

訪問目的地の SACCS については、インターネット情報のみであったため、2006 年 York の学会で SACCS の報告者 Patrick Tomlinson（T 氏）と面識をもったことから、2011 年 5 月より T 氏と、さらに SACCS 本部にメールで訪問調査の依頼をおこなった。SACCS の元施設長であった T 氏は現在、米国で施設コンサルタントをしているが、T 氏との毎日のメール交換により SACCS の情報を得て、7 月 12 日に SACCS 創立者で理事長にあたる Mary Walsh から訪問の承諾を得た。日本の旅行会社も不明の土地であるため T 氏との交信と英国在住の経験のある研究協力者松平の協力をえて準備をすすめ９月９日に日本を出発した。

３．SACCS 訪問調査内容と面接スタッフ

同行の研究協力者平田修三と下記の日程で訪問活動を行ったが、案内を担当したスタッフはいずれも２０年のキャリアをもつ専門職ソーシャルワーカーで、T 氏 の弟子にあたる人々であったため、大変好意的にむかえられた。英語の意思疎通については共通の専門基盤があるために困難はなかったが、講義および Q&A の全対話は IC レコーダーに録音した。

９月１２日

AM: ① オリエンテーション：Rob Mckay(Operations Director)

②ライフストーリーワーク（LSW）作業室案内と技法説明。治療チームの紹介　Rachel Oliver(Life Story Manager)（写真３）

PM：③ 創設者 Mary Walsh との Q&A.　子どもインタビューに用いた Toy Box のぬいぐるみの披露とインタビューの実演（写真２）

９月１３日

AM:　④LSW 導入の経緯と SACCS の LSW について本の著者（文献１）より３時間にわたる講義と討論 Richard Rose(Clinical Practice Director)

PM:⑤SACCS のセラピーについて治療室の案内と心理臨床家によらないアートセラピーとプレイセラピーの意義とセラピストの資格について Q&A。 Penny Strange(Therapy Manager)

⑥LSW スタッフより写真撮影厳禁の子どものストーリーが書き込まれている 15 メートの wall paper をみせてもらう。（スタッフ　Phil Lawrence,　Andreea Aschenazi）

９月１４日

AM ⑦１日の見学先のオリエンテーション Rob Mckay(Operations Director)

⑧Shrewsbury に８か所ある治療ハウスの一つ Cartwheel ハウスを訪問。ハウスの治療的環境づくりの配慮について治療親から説明を受け、部屋や庭を案内してもらう。

PM⑨地域の学校に参加できない６~１３歳の子どものための１０人定員の付属学校 Flying High を訪問。教室で子どもから質問を受けたり、休み時間に子どもたちと交流の機会をはじめてもつ。（これまで子どもがいる治療場面の見学は厳禁だった。）

⑨SACCS 本部に戻り、里親支援と里親研修について Q&A。 SACCS で治療を受けた子どもの里親委託の方法と追跡調査、里親候補者の条件と研修について聞く。 Jim Hamil (Director of Fostering)

９月１５日

AM:⑩本部から８０キロ離れた Coleshill の分室に１日案内してもらう。Niall Kelly(Assistant Director of Recovery Service)

車中で皆が「会社」と呼んでいる SACCS の組織、スタッフのキャリア、性的被虐待児の対応の難しさについて話し合う

⑪分室の見学のあと、LSW の作業室の案内と LSW の子どもむけの自作絵本をプレゼントされる。（LSWorker Katy Reader）Katy は治療親を数年経験してから LSW の専門家となったという。

⑫次に、アートセラピーの作業室を案内してもらい、水中絵具での模様創作や指人形劇の実演をみせてもらう。（セラピスト Samantha Stubbs）

PM:⑬Coleshill 地区にある４か所の治療ハウスのひとつ Kingfisher のハウスに移動。ハウスマネージャーと二人の治療親に会い、ハウス内を案内してもらう。この地区のハウスは豪華な設備を備え、壁にはポケモンポスターが飾られている。地域により不動産価格が異なり、この地区では、豪華なハウスが購入できるという。

９月１６日　最終日

AM:⑭治療親の経験があり、現在は治療親の研修を担当している ColinUroquhart (Therapeutic parents manager)から治療親の経験 、研修内容について聞く。治療親としてハウス勤務ができるまでの待機中の研修プログラムの説明を受ける。暴力の強い子どもへの「拘束の権限と手法、体罰」の研修が重要という。（資料１　添付）

最後に⑮Rob McKay と秘書の Fiona Dryden より、SACCS の出版物、資料が渡され、お別れをする。

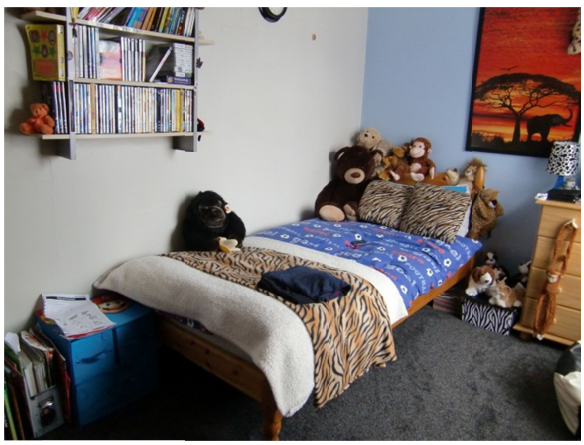
４．SACCS 訪問後の交流

訪問に際して交流をもったスタッフとはその後もメールで交信を続け、訪問時には得られなかった情報や補足資料を送ってもらう。

1.　SACCS の外観

2.　Mary Walsh と

3.Life Story Worker と LSW 作業室



4.　治療ハウスの子どもの個室

C.研究結果

本年、創立２５周年を迎える SACCS の治療理念、対象児の特徴、治療ハウスと治療親、治療親と里親の研修、治療後の子どもの里親委託、専門スタッフ、セラピーと LSW、治療チームについて、主に訪問から得られた情報と観察を中心に報告する。（文献１～６、資料１～６）

１．２５周年をむかえる SACCS.

公務員ソーシャルワーカーであった Mary Walsh が性的被虐待児の裁判などで苦労する中で創設された機関であるが、１部屋のオフィスから現在地に移るまでに苦労の歴史があった。現在地（写真１）は、森の中の水車のある築年１００年以上の建物を改造した迷路のような小部屋のオフィスがある古い建物であるが、これがまさに治療的環境、Winnicott のいう包容するような環境（holding environment）ととらえられている。窓のある明るい部屋もあるが、洞窟のような窓のない部屋がトラウマを背負った子どもには安全な場所として好まれているという。

２．ＳＡＣＣＳの対象児

主としてイングランドとウエールス地方の子どもを受け入れているが、全国から重いトラウマを受けた４歳から１２歳の被虐待児が紹介され、７割が性的被虐待児と言われている。知的、身体的障碍児は除外しているが、発達障碍児は含まれている。

定員は６０人で、１２か所のそれぞれ大変離れた治療ハウスで生活し、１ハウスに５人が生活する。訪問時は在籍児は５８人であった。年齢幅は受け入れ時は最年長が１２歳であるが、３年の経過で、年長児は１５歳になるが、訪問時は在籍児の平均年齢は１１歳であった。

訪問時に付属の学校と治療ハウスでみかけた子どもたちは地域の学校にまだ通えない状態であったためか、体格も標準より小柄で、きゃしゃでおびえたように萎縮した様相で、日本の児童福祉施設ではみかけない姿を呈していたが、スタッフや客人との会話や話題は年齢相当であった。診断分類では、抑制型の反応性愛着障害の子どもたちとアスペルガー障害の子どもが確認された。

３．治療ハウスと治療親の役割

SACCS で受け入れられた子どもは治療ハウスで１０人の治療親と３年間過ごし日常生活を送りながら、回復プログラムにそった治療をハウスの生活と、本部でのセラピー、LSW を通して受けている。

一人の子どもは固定した治療親を２人もち、ローテーション勤務の中でも常に、自分の治療親と過ごせるようになっている。治療親は２人宿泊制で、宿泊勤務は週二回である。昼間は日勤のマネージャーが勤務し、常に３人の治療親が勤務しているが、治療親は地域の学校、本部の治療プログラム、病院などに車で送迎するため常に子どもと一緒に行動しているため、訪問時、ハウスにいた治療親は１～２人で、掃除、洗濯、食事準備などで忙しい時間帯であった。訪問したハウスは来客に備えてきれいにされていたが、ふだんも散らかっている場合は、きれいな環境を体験してもらうために、治療親は片づけを手伝っているという。４歳から１５歳までの子どもは全員個室を使用していた。(写真４）

４．治療親の治療的役割

治療的コミュニテイ、治療的環境としてのハウスを整え、そこで生活しながらいろいろ学習できるようにするのが治療親の役割とされている。日常の生活習慣を大切にし、炊事、洗濯、掃除、食事、送迎、看病、入浴　パーテーなどの世話をとおして子どもとの愛着関係を築くことが大事とされている。治療親の７０％は女性で、子どもには名前を呼ばせており、実親のみをパパ、ママと呼ばせている。

５．治療親の研修と採用

治療親は、子ども関係の仕事経験のある大卒者であることが条件で、希望者はまず志願者リストに登録され、２年間の研修を修了して資格を取得したものが、SACCS で３週間の研修を受ける。２年間の研修は、地元の大学の社会人コースで Moodle e-learning と個別面接授業で２年から３年かけて資格がとれる制度が紹介されている。経費はかかるが、修士の資格も取れる仕組みになっている。SACCS の３週間の研修は添付したプログラム（参考資料１）を参照してほしいが、この研修では、トラウマを受けた子どもへの対応、事故、火災、応急処置の研修の他に P.R.I.C.E(Protecting Rights In a Caring Environment)という子ども自身と他児、とスタッフの安全を守る講習に４日をとっている。これは SACCS の治療親の必修の研修で、暴れる子どもの「拘束の規程と手法」が含まれ、法的な裏付けも設けている。

治療親の退任がある時は、待機者リストから選ばれた者は、退任予定の治療親のもとで３か

月実習をしてから採用されている。
訪問時に出会った治療親たちは、自分の職務に大変誇りを持ち、はりきって働いていることが伺われた。

６．里親研修と里親委託

SACCS の治療ハウスに紹介される子どもは多くて数十か所の里親家庭が不調に終わっている。虐待によるトラウマに加えて里親委託がつぎつぎうまくゆかないというトラウマを抱え、強い人間不信に陥っているので、ハウスで３年をかけて回復治療を行い、そのあとに、SACCS の里親担当ソーシャルワーカーにより、SACCS についての研修を受けた里親に委託される。
里親候補者の個別訪問面接の事例報告が資料３にあるが（添付せず）、丁寧に訪問評価をしてから、ふさわしい子どもを委託している。里親候補者は４２~６０歳とされているが、独身の男性に委託することもあり、すばらしい養育がなされている事例が確かめられている。里親の研修は以前はホテルなどで４日間行っていたが、それでは参加できない里親が多くなり、現在は週末２日間の９時―４時半の講習となっている。７~１４人の里親研修が望ましいが最近里親志願者が少なくなっているという。委託するまでには７か月かけ、５０％は家庭訪問によるアセスメントをおこなっている。

７．SACCS のスタッフ.

スタッフの多くは、一般の施設養育のキャリアを経てＳＡＣＣＳに異動し勤務歴２０年以上のベテランと言われている。ソーシャルワーカーとしてのキャリアにセラピストとしての専門性も身に着けており、筆者らへの対応をみても共感性に富んだ人たちであった。児童精神科医や心理臨床家が治療チームにいないことを聞くと、医師は患者のプライバシー尊重の立場から、その診断内容について知らせてくれないので、スタッフは精神医学も学び、子どもの診断が出来ることもめざしているという。またセラピーを担うのは、アートセラピストやプレイセラピストで、これはサイコロジストではないこと、後者はプライドが高く、チーム治療にむかないということを一部のスタッフから聞いた。
定員６０人以下の子どもに対して治療親を含めて１７５人の専門常勤スタッフがいるというが、チームワークのよさは、ソーシャルワークに根ざした治療チームであるからか興味あるところである。

８．ライフストーリーワークについては、研究協力者　平田　修三が報告している

D．E．考察と結論

第一年度は訪問見学することにより、重い被虐待児の治療的グループホームにあたる治療ハウスの実情を調べ、里親支援の場となるかを考えた。Mary Walsh は、これだけダメージを受けた子どもをすぐ里親委託することは、たとえ専門里親といわれる相手でも適切ではないことを強調し、里親委託の前に治療ハウスを利用することをすすめている。
日本では、SACCS の対象児で地域の学校にゆけないような子どもは、情緒障碍児短期治療施設や精神病院が第一選択肢となっている。P.R.I.C.E(Protecting Rights In a Caring Environment の技法が必要な子どもは児童自立支援施設にまわすという処遇がなされ、これまでは家庭的養護の対象として考えられてこなかった。英国では、１９８９年の児童法以降、どのような子どもにも家庭的養護が必要と努力がされていたが、日本ではこの分野でも大変遅れていたといえる。筆者はそうした子どもたちの２５年にわたる経過を体験しているが、精神病院を経て、成人後は精神障害者の地域支援プログラムを利用せざるを得ない状況をたどることになった例がある。
日本のグループホームの現状は、６人の子どもに職員２人という条件は、非常勤スタッフが出入りするにしても、また問題の少ない子どもを対象とするにしても、子どもにも、職員にもあまりに厳しい条件である。
社会的養護下にある子どもこそ、愛着関係を築くために多くの専門的キャリアのある職員が必要であるということを、SACCS の治療親をモデルに考えてゆきたい。
また、治療親になるための研修を、日本の研修内容と比較することも次年度の課題としたいが、個人負担が大きくても、魅力ある仕事となっている背景についても今後の調査課題としてゆきたい。
SACCS は治療パッケージを行政に売り込む

会社という発想であるが、行政がそれを買ってくれるためには、たえず治療効果を報告し評価を受けなければならないというプレッシャーの中で仕事をしていることが感じられた。イングランドとウエールスの地方財政の支援を受けているので、経済不況があるとケースの依頼件数が減らされる心配も聞かされた。

今回は、訪問調査の聞き取り情報であるため、次年度は、招聘予定の SACCS 関係者より、財政基盤についての情報を得て、日本の治療支援システム構築への構想をねりたい。

本研究の最終年度には、日本で必要な重い被虐待児を養育する里親支援の機関についてのパッケージをつくるが、まず、モデルとして治療的グループホームをつくり、施設や里親家庭で養育上の困難がある子どものケアを行い、再び同じ里親家庭かあらたな家庭に委託するシステムをつくってゆきたい。SACCS 本部の回復治療を行う場を新たにつくる必要があるか、既存の大学や病院に治療センターを設置するか、パッケージ構想をまとめてゆきたい。

現在、関係者で治療的施設ケア（文献６）の翻訳をすすめているが、社会的養護が必要な子どものケアについての具体的なマニュアル書がない現状で、翻訳書がケアのレベルをあげることも期待したい。

G．研究発表

学会発表

日本子ども虐待防止学会

第１８回学術集会高知りょうま大会

２０１２年１２月７－８日　予定

参考文献

1. Rose,R.&Philpot,T. The Child's Own Story—Life story Work with Traumatized Children—　2005　1-160
2. Rymaszewska,J.&Philpot T. Reaching the Vulnerable Child—Therapy with Traumatized Children—London: Jessica Kingsley Publisher 2006 1-144
3. Pughe,B.&Philpot,T. Living Alongside a Child's Recovery—Therapeutic Parenting with Traumatized Children— London: Jessica Kingsley Publisher 2007 1-144
4. Tomlinson,P.&Philpot,T. A Child's Journey to Recovery—Assessment and Planning with Traumatized Children— London: Jessica Kingsley Publishers2008 1-160
5. Thomas,M.&Philpot T Fostering a Child's Recovery—Family Placement for Traumatized Children—London: Jessica Kingsley Publisher 2009 1-156
6. Barton S.,Gonzalez,R &Tomlinson P. Therapeutic Residential Care for Children and Young People— London: Jessica Kingsley Publisher 2012 1-287

参考資料

１．Induction timetable Part 1:Weeks1-3 Oct.3(Mon)~Oct.21(Fri.),2011
治療親研修プログラム

2. Glyndwr University FDA Therapeutic Child Care—Course information booklet
近隣大学での治療親の資格認定受講案内

3. Prospective Foster Carer(s) Report(FormF) England
SACCS のソーシャルワーカーJim Hamil (Director of Fostering) の里親アセスメントの１事例報告　２５ページ

４．Children's Workforce Development Council (CWDC)報告書 2010
Exploring the experiences of living in a large group therapeutic community—the views of current and ex-residents(Jenny Carter)

5. Recovery Assessment　Child 1 April20,April28,May5,August25,2011
SACCS 治療評価報告書

6. SACCS 案内パンフレット
Treatment Services for Traumatised Children
The SACCS Guide to Personal Development
The SACCS Guide to Recovery
The SACCS Guide to Personal Development

謝辞

研究協力者　松平千佳先生には、英国調査に際してご協力いただき、春日明子園長には、日本のグループホームの抱える課題についてお教えいただき、兼井京子先生には、旧養育家庭センターの歴史の情報をいただき深く感謝いたします。